La Informilo de Nagoja Esperanto-Centro

センター通信 第299号　　2021年1月26日発行

発行：名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro

461-0004 名古屋市東区葵一丁目26-10ユニーブル新栄301号
公式サイト　http://nagoya-esperanto.a.la9.jp/
Facebookページ　https://www.facebook.com/nagoja.esperanto
郵便振替口座 00840-8-40765 「名古屋エスペラントセンター」

日本エスペラント大会
記念品
(2-6頁に記事)

◀◀　目次　▶▶

『歴史・文学・エスペラント』刊行までの経緯（伊藤俊彦）.....2
大会ボランティアの声（Nakayama Kinzi・中山昭子）.....7
Vidindaj Lokoj en kaj ĉirkaŭ Nagojo (9)（IMAJDA Kenĝi）.....9
Ĉu la homaro povas progresi al eterna paco?（Yamaguti Sin'iti）.....12
活動日誌・中級講習会.....13
維持員総会・ザメンホフ祭・編集後記.....14

『歴史・文学・エスペラント』刊行までの経緯

伊藤　俊彦

2020年９月20日から22日にかけて第107回日本エスペラント大会が名古屋市で開催されました。大会記念品として、私がこれまでに書いた書評を収録した書評集『歴史・文学・エスペラント』を刊行していただきました。私は歴史や文学の研究者でもなんでもなく、市井の読書好きにすぎません。それにもかかわらず、これまでの拙い文章を本にしていただいたことに深く感謝しております。また、つい調子に乗って、ものの弾みでずいぶん大仰なタイトルをつけてしまい、自分でも恐縮しております。以下では、本書の刊行のきっかけから編集を終わった時点での感想までを思いつくままに書かせていただきます。

１　出版のきっかけ

日本大会実行委員会で大会記念品をどうするかが議題になりました。さまざまな案が出され、私も、ドイツ文学研究者でエスペラント文学にも造詣の深い森田明氏にエスペラント文学について執筆していただいてはどうかと提案しました。ところが当の森田氏から「お前はこれまで書評をたくさん書いているのだから、それをまとめればいいだろう」と、いわば逆提案され、永瀬義勝氏始め他の方からも同旨の提案をいただきました。その結果、全く予想もしていなかったことに、私の書評集を大会記念品として出すことになってしまいました。昨秋のことでした。

２　書評というジャンルについて

“Literatura Foiro”や“La Gazeto”など文学専門誌は言うまでもなく、“Esperanto”や “Monato”、“La Ondo de Esperanto”などの機関誌や一般誌でも書評は充実しています。それにひきかえ、日本のエスペラント界では、“La Revuo Orienta” や “La Movado”などを見ても、本に関する情報は後者に渡辺克義氏と私の書評が時々掲載されるほかは、新刊案内ぐらいで、少なくとも一般のエスペランティストを対象とした書評はあまり充実しているとはいえません。また、私事になりますが、私が書評を書いても、それに対する反響はほとんどありません。

私は日本のエスペラント出版史に詳しいわけではありませんので、これまでに刊行された書評集をあげよと言われても、山口美智雄氏の『エスペラント読書ノート』か、坪田幸紀氏の『葉こそおしなべて緑なれ…』（収録されているのは書評だけではありませんが）で、ほかには宮本正男作品集に書評を収録した巻があったことを思い出すくらいです。そうした意味では、真似をすべき類書に乏しい状況で、編集にはずいぶん苦労しました。しかし、曲がりなりにも書評集として一冊の本にまとめ

ることができたことに安堵しております。まことに拙い内容ながら、書評というジャンルについて知っていただき、少しでも読書の刺激になれば幸いです。

なお、一般書店に行けば、本をめぐるエッセイ、書評集などはたやすく目に入ります。ここで書名を挙げるのはおこがましいことながら、今回、編集に当たって、例えば『鶴見俊輔書評集成』１～３（みすず書房、2007）、池澤夏樹『嵐の夜の読書』（みすず書房、2010）他、井波律子『書物の愉しみ』（岩波書店、2019）などを大いに参考にさせていただきました。その他、須賀敦子、長田弘、中井久夫、内田義彦といった方々の書評や書物をめぐるエッセイなどをかねてから愛読してきましたので、本書には、その影響もあるかもしれません。

３　コロナ禍のもとでの編集への取組

１で述べたような経緯で大会記念品としての書評集を出していただけることになり、編集に着手しました。これまで“La Revuo Orienta”、“La Movado”、『エスペラントの世界』、『センター通信』などに書いた書評はたくさんあるので、編集ではそれらを取捨選択すれば足り、大した作業にはなるまいと思っていました。しかし、実際に着手してみると、そう容易なものではありませんでした。本書に収録した書評の発表時期は1981年以来40年近くにわたっており、そのつどの関心もさまざまです。しかし、一冊の本にするにあたっては、ある程度の統一感のある本にしたいと思いましたので、あちこち細かく手を入れました。

編集の過程で、新型コロナウイルスの感染が世界的に拡大し、日本でも緊急事態宣言が発せられるほどになりました。そうした状況のもとで、外出や旅行もままならず、引きこもって編集に力を注がざるを得ませんでした。その過程で、これまで漠然と抱いていた自分の問題意識が明確になってきたように思います。個人の危機と社会の危機（例えば戦争、革命、権力による弾圧、自然災害など）に対して、エスペラント運動あるいは個々のエスペランティストがどう関わったか、そしてそれをどう個人が記憶するのか、改めてそうしたテーマについて考えるきっかけとなりました。私自身が、ささやかな人生において、いくつもの危機に逢着して、絶望し、息絶え絶えになりながら、それでも何とか現在に至っていることを再認識しました。そうした意味で、歴史、危機、記憶をいわば隠れたキーワードとして、本書を編集することになりました。

４　本書の構成

本書の構成についてもさんざん悩んだ末、結局、４章編成に落ち着きました。各章のタイトルを挙げると、第１章「エスペラント原作文学あれこれ」、第２章「ノンフィクションと翻訳いくつか」、第３章「エスペラントの歴史を散策する」、第４章

「よみがえる人と書物」です。第４章では、ランティの日本滞在（1936〜37）をめぐる長編エッセイと、1980年代初頭に執筆した本の紹介を収録しました。

また、書評ではありませんが、書物に関わるコラムを収録しました。「表紙の謎」、「読んでいない本について語る」、「行間からひびいてくる声」、「追悼　伊東幹治」、そして最後にいわば本書のまとめとしての意味を持つ「エスペラントの本を読むことについて」の５編です。

さらに、索引についても、どのような方針で作成するか山田義さんと打合せを行い、試行錯誤を重ねた末、現在のようなかたちに落ち着きました。実際の索引の作成については山田さんに全面的にお世話になり、おかげさまで詳細な人名、書名索引を掲載することができました。

５　協力者

本書の発行にあたって協力いただいた方々については、「あとがきにかえて」で言及しておりますが、ここでも改めてやや詳しく書かせていただこうと思います。

これまで数だけはたくさん書評を書いてきました。本書を刊行することになり、そのうち、どれだけを収録するか、どのような構成にするか、現時点でどこまで手を入れるか、などについて一緒に考えていただける方、いわば編集者として伴走していただける方がいてほしいと切実に思いました。しかし、そうした役割を引き受けてくれる人を見つけることができず、一時は途方に暮れました。そのとき、山田さんが編集者の役割を買って出ていただき、本文の版下作成、印刷所との連絡調整、また４に書いた索引の作成など、多くの仕事を精力的にこなしてくださいました。感謝のほかはありません。拙宅にお越しいただき、あるいは夫婦ともどもお宅にお邪魔して打合せを行ったり、印刷所に同行したり、果てしないメールのやり取りを続けたりして、二人三脚で編集を進めたことは忘れられない思い出です。

また、森田明さんからは折に触れてアドバイスをいただきました。編集の過程でともすれば自信と気力を喪失することが多かったのですが、森田さんの励ましのおかげで、曲がりなりにも最後までたどり着くことができました。

さらに、吉岡真紀さんには数度にわたり綿密きわまる校正をしていただきました。おかげさまで、こちらが見過ごしていた誤字、誤植、OCRの変換ミスをずいぶん減らすことができました（“La　Movado”に掲載された書評のOCR変換については、福本博次さんにお世話になりました）。また、堀田有里さんには校正に加えて、日本エスペラント協会理事（大会組織部長）として、本書の刊行について、いろいろご配慮を賜りました。

表紙や各章の扉などのデザインは、これまでもお付き合いさせていただいたブックデザイナーの河村誠さんにお願いし、また、そこには米川五郎さんがパソコン版画で作成された作品を使わせていただきました。おかげさまで瀟洒な装丁に仕上が

り、本書を手に取られた方々から高く評価していただきました。

6　発行・発売

本書の発行元は私が所属する名古屋エスペラントセンターです。同センターはこれまで、本書中でもたびたび言及した全文エスペラントの雑誌“tempo”の復刻版や、“Zamenhofa　Ekzemplaro”など、日本エスペラント出版史に残る書物を刊行し、そのうちの何冊かについては私も少しばかり関わってきました。今回、図らずも本書がそのうちの一冊に加えられることになり、感慨無量です。さらに、一般財団法人日本エスペラント協会には発売元になっていただきました。本書をエスペランティストだけでなく、広く一般の読書人にも読んでいただけることを著者としては念願しております。

7　編集を終えて

編集を終えて感じていることを、とりとめなく書いてみます。

まず本書は、これまでの日本エスペラント大会の大会記念品に多かった地域のエスペラント運動史というような客観的な歴史記述や資料集ではありません。あくまでも個々の書物についての私の評価を軸とした文章の集成なので、大会記念品としては著者の主観があまりに出すぎているかもしれないという懸念もあります。内容の紹介や出版の経緯、時代背景など、できるだけ公正な記述に努めたつもりですが、書評である以上、評価が入ることは避けられません。評価が妥当であるかどうかの判断は読者に委ねたいと思います。

そして、それ以前に、私は専門の歴史研究者でもなければ文学研究者でもなく、市井のエスペランティストにすぎないので、本書には初歩的な誤読、強引な読み込みなどが満ち満ちていることと思います。むしろそうした研究者の方々に専門分野の知見を踏まえて書評を書いていただければ、私ごときが一知半解で書評集と称してこんなものを出す必要はありませんでした。私はそれらの書評を読んで、そこで論じられている本を楽しめばよかっただろうにと思います。

なお、本書には私のこれまでの読書会の経験が反映されていることを改めて感じます。故坪田幸紀氏とふたりだけの読書会でE.Borsboom“Vivo　de　Lanti”を読んだこと、また、この５年ほど“Ni　legu”と名づけた読書会で小説やノンフィクション、雑誌などを読んでいることは本文でも言及しました。本書はそうした読書会のいわば副産物でもあると感じます。改めて坪田さん始め読書会のメンバーの方々に感謝したいと思います。

最後に。あまり一般には知られない作品を含む外国文学の紹介は従来から多数刊行されています。近年でも、例えば奥彩子・西成彦・沼野充義編『東欧の想像力―現

代東欧文学ガイド』（松籟社、2016）とか、小倉孝誠編著『世界文学へのいざない』（新曜社、2020）といった本が私の手元にあります。邦訳のない本ばかりを紹介した『いま、世界で読まれている105冊』（TEN-BOOKS、2013）といった本もあります。また、さまざまな言語で書かれた小説や詩を収録したアンソロジーとして『世界文学アンソロジー』（三省堂、2019）といった本も出ています。

これらにならって、『エスペラント文学へのいざない』とか『エスペラント文学アンソロジー』といった本をどなたかに編集していただき、エスペラント文学のいわば実物見本として、その豊饒な世界の一端をエスペランティストでない文学好きの読者に知っていただけるといいのに、と夢想しています。最近は出版に要する経費も安くなってきていますので、まんざら可能性がないわけではないと思います。

中国新聞

23 宇部・山口市 2020年（令和2年）9月16日（水曜日）

「エスペラント」本の書評集

岩倉の伊藤さんまとめ 20日から日本大会

国際共通語「エスペラント」について学び、交流する「日本エスペラント大会」が二十一～二十二日、名古屋・名駅のウインクあいちで開かれる。大会記念企画となるエスペラントの本の書評集をまとめた岩倉市の伊藤俊彦さん（75）＝岩倉市下本町＝は「日本語でエスペラントの本を扱う書評集はあまりない。マイナーな言語で本の発行部数は少ないが、埋もれていく本の存在を伝えたい」と話す。

エスペラントはポーランドの眼科医ラザロ・ルドビコ・ザメンホフが一八八七年に学びやすい国際共通語として考案。言語や文化の違いを尊重しながら、コミュニケーションを図れるようにしている。

書評集「歴史・文学・エスペラント」には、一般財団法人「日本エスペラント協会」（東京）の機関紙などで紹介した約五十編を収録。歴史や文学の中でエスペラントが果たした役割が分かる小説やノンフィクションなどを取り上げた。

語学に関心が高い伊藤さんは一九七一年に名古屋大に入り、エスペラントのサークルで知識を深めた。県職員となり多忙な中でも学び続け、約四十年前からエスペラントでしか読めない本の紹介もするように。「日ソ連崩壊後に首都の道を歩んだ人のほか、日本にいると想像できない世界がある。エスペラント話者同士ですぐに紹介できる読書も魅力だ。読書を通しての発見もあり、学んでいてよかった」と話す。

大会は協会などが毎年、各地で開催。二十日は、一般の人も参加できる無料の講座を開く。エスペラントを紹介したり、世界の楽器やおもちゃを実演したりする。十七日までに協会内の大会事務局（03・3293・4581）に申し込む。書評集はA5判、二百十四ページ、千百五十円（税込み）。二十日に協会から発売される。（田口有紀）

書評集を手に「エスペラントでしか読めない本の中に秘宝があり、世界観もひろがった」と話す伊藤さん＝岩倉市下本町で

（追記）

この文章は、当初、日本エスペラント大会で報告するつもりで準備した草稿（報告は結局行いませんでした）に加筆したものです。なお、本書刊行後、エスペラント界内外から有益なコメントをいくつも頂戴しましたが、それらについては別の機会に報告させていただきたいと思います。

（2020年12月23日脱稿）

☆ 大会ボランティアの声 ☆

大会書店でボランティアとしてはたらいていただいた中山夫妻よりレポートと感想をいただきました（山口）

Libroj atendas!

Nakayama Kinzi

Dum la kongreso mi deĵoris ĉe la libroservoj. Mi ludis la rolon de librovendisto de JEI kaj NEC. Mi ne kalkulis kiom da personoj venis al la servoj, tamen povas diri, ke multe da personoj venis kaj ili havis ŝancon rekte preni kaj foliumi librojn. Jene mi skribas parolojn inter aĉetintoj kaj mi.

Virino el publika programo parolis ke ŝi havas intereson pri Miyazawa Kenzi kaj sciiĝis pri Esperanto. Mi parolis ke en la verko de Inoue Hisasi "Teatra trajno de Ihatovo" (イーハトーボの劇列車) Miyazawa Kenzi instruas Esperanton. Vere en la leciono Kenzi demandas en Esperanto: Kiu vi estas? La respondo: Mi estas homo, kamparano ktp.

Viro: Kie estas nove eldonita *Genzimonogatari*. Mi ne povis trovi ĝin el librolisto de NEC, tamen aĉetinto mem ĝin trovis el vicigitaj libroj de NEC. La titolo estis "Rakontaro de Genĝi 1".

Virino: Mi deziras aĉeti "Eta Princo". Ni serĉis sed devis diri: Pardonon, estas bedaŭre ke ni ne kunportis ĝin.

Viro: Kiel oni povas aĉeti libron "Etero kaj Vento kaj Steloj kaj Poemoj" de Jun Dong Ĝu, ĉar ĉe JEI ne estis stoko. Mi respondis: Volu demandi al Korea Esperanto-Asocio aŭ libroservo de UEA. Aldone mi parolis ke lastatempe mi legis romanon en kiu oni povas legi vivon de la poeto. Li venis al Japanio, studis en Tokio kaj Kioto. Tamen li estis arestita kaj devigita resti en la malliberejo Hukuoka. Tie li mortis.

De la alia vendisto aŭdis: Unu viro elektis iun libron, tamen li rezignis aĉeti, ĉar devas pagi poŝtĝire.

Mi povis ludi la rolon de librovendisto, dankinde! Vidis ke malnovaj kaj novaj libroj atendas aĉetontojn.

ボランティアとして参加して

中山昭子

本の販売ボランティアとして参加しました。一日目はずっと座っていたので、2日目は出店をしている人たちに話しかけてみることにしました。

忍岡妙子さん：私は井上ひさしの『父と暮せば』の演劇を三回見て、本当にこの作品はいいと思った。原爆のことを少し勉強していると話したら、彼女は高齢の被爆者に代わって被爆証言の伝承者として、全国を講演していることを、話してくれて、“Atestas atombombito kordevena”の本を下さった。11月16日の中日新聞に「核廃絶を求め１人で集めた10万9000筆」の記事が出ていたので驚いた。９月１８日現在で計1261万2798筆が集まり、平和記念公園で修学旅行生や観光客を案内したり、恒例の被爆者に代わって被爆証言をしているからすごい人だと思った。彼女の分科会に出席した。

萩原洋子さん：『日本エスペラント運動の裏街道を漫歩する』を買ったら、『エスペラント運動の展望I』を頂いた。『斎藤秀一とその時代』の校正を一生懸命やっているのよ、とその校正中の分厚い原稿を見せてくれた。彼女の分科会にも参加した。

堀泰雄さん：『蟹工船』は日本語が難しいので本を読むのをあきらめたと言ったら、エスペラントの方が読みやすいかもしれないと言われた。外国人に分かるように単語の説明を絵で描いてあると説明してくれた。ホリゾントから沢山の安い本を出版しているのは自分で出版しているから出来ることだと言っていた。ワンコイン（500円）で本が買えるならうれしいですね、と言ったら、「でも本が売れないんだよね」、とボヤいていた。

藤巻謙一さん：エスペラントの勉強法や『エスペラント中級独習』の中の住井すゑの “La reĝo pimento” が面白かったと言ったら “Japana Literatura Juvelaro” の中に ‘La rompita arko’ が収録されていると教えてくれた。

伊藤俊彦さん：私がエロシェンコの “Unu paĝeto en mia lerneja vivo” が良かったと言ったら、彼の『歴史・文学・エスペラント』の中の色々な話をしてくれた。後日この本の中で、いとうかんじさんが、「高杉一郎が訳したエロシェンコ作品を読んだのを機にエスペラントに関わるようになりザメンホフに傾倒していく」を見つけて驚いた。

色々な人と話ができ楽しい大会でした。

Vidindaj Lokoj en kaj ĉirkaŭ Nagojo (9)

Higashiyama Zoo
(東山動物園)

[ĝenerala informo]

Higashiyama Zoo (kun botanika ĝardeno, oficiale nomata *Higashiyama* Zoo kaj Botanika Ĝardeno) situas en *Chikusa-ku*, la orienta parto de Nagojo. Ekde la malfermo, ĉiuj urbanoj amas kaj fieras pri ĝi.

La zoo estas la plej granda en Japanio je abundeco de specio, kaj la dua je vasteco kaj je la nombro de vizitantoj dumjaraj. Tie vivas pli ol 500 specioj da animaloj, inkluzive de la popularaj kiel leono, elefanto kaj ĝirafo, aŭ la maloftaj kiel dukolora mielvorulo[1], ĝangala kato[2] kaj vulkankuniklo[3].

Krom la zoo, apude aŭ ene troviĝas la botanika ĝardeno, la amuzparko kaj *Sky Tower*, la turo 134 metrojn alta, do ili kune faras ĝojigan lokon por ĉiuj generacioj!

[historio]

La origino de *Higashiyama* Zoo datiĝas antaŭ ĉirkaŭ 130 jaroj. En 1890 IMAIZUMI Shichigoro (今泉七五郎), animalkomercisto, fondis privatan zoon, nomatan "*Namikoshi* Eduka Zoo" (浪越教育動物園) en *Naka-ku Maezu-cho* (nun *Kamimaezu*), kaj malfermis por la publiko sian kolekton de animaloj.

En 1918 li donacis al Nagojo la kolekton; tiam la urbo malfermis “municipan zoon de Nagojo apartenantan al *Tsuruma*-Parko" (名古屋市立鶴舞公園付属動物園) en *Showa-ku Tsuruma-cho*. Poste ĝi ŝanĝis la nomon al "Municipa Zoo de Nagojo" (市立名古屋動物園) en 1929.

En 1937 la zoo translokiĝis al la nuna loko kaj denove ŝanĝis la nomon al "*Higashiyama* Zoo" (東山動物園). Pro la milito la zoo dumtempe fermadis sin en 1945, sed tuj remalfermiĝis en la sekvanta jaro. En 1968 la zoo kaj botanika ĝardeno unuiĝis kiel "*Higashiyama* Zoo kaj Botanika Ĝardeno" (東山動植物園).

---

[1] scienca nomo: *Mellivora capensis;* angle: ratel

[2] scienca nomo: *Felis chaus;* angle: jungle cat

[3] scienca nomo: *Romerolagus diazi*; angle: volcano rabbit

[popularaj animaloj]

En ĉiu dua jaro okazas voĉdono de vizitantoj por decidi la plej popularan animalon en la zoo. Sube mi prezentas kvin laŭ la rezulto en la lasta aŭtuno.

1. koalo

Koalo regajnis la unuan rangon post ok jaroj. Koalo estas simbola animalo de *Higashiyama* Zoo ekde la eknutro en 1984, la plej frue en Japanio kun du aliaj zooj.

Nun vivas naŭ koaloj inkluzive de unu bebo 1-jaraĝa. Preskaŭ ĉiam ili dormas sur arbo, sed foje manĝas folion de eŭkalipto. Tamen se bonŝance, oni povas vidi ilin eĉ kurantaj sur la tero!

2. ĝirafo

Ĝirafo okupis la duan rangon, ĉefe ĉar bebino naskiĝis en oktobro lastjare! Lastatempe la bebino estis nomita "Kanna" laŭ japana alinomo de oktobro "*Kannazuki*". Krom la bebino vivas la gepatroj, Torino (15-jaraĝa・♂) kaj Mao (13-jaraĝa・♀), kaj Ameri (3-jaraĝa・♀).

El la altejo nomata *Kirin-Dekki* (ĝiraf-ferdeko), kiu foje malfermiĝas al la publiko, oni povas vidi ĝirafojn de tre proksime. Observu detale la langon, la dentojn, kaj la okulharojn.

3. elefanto

Kvar Azia-Elefantoj vivas en la domo nomata *Zooziam*, konstruita simile al tiu en Srilanko, ilia hejmlando. Tie oni povas ne nur observi la elefantojn, sed ankaŭ lerni la historion kaj vivmanieron.

Bedaŭrinde la sola Afrika-Elefanto, Kenny, forpasis en aŭgusto lastjare. Ekde sia alveno en 1975, li estis amata longe dum 45 jaroj. Dankon Kenny, ni ne forgesos vin!

4. leono

En la zoo vivas leona familio; patro San (angle signifas "suno"), patrino Luna (latine "luno"), kaj ilia filo Sora (japane "ĉielo"). Ilia roro sonoras tiel laŭta kaj forta, ke vi tremos pro timo! Por aŭdi la roron, vidu ilin post 16:00, kiam ili eniras en ĉiun apartan ĉambron.

5. gorilo

Inter goriloj, troviĝas la rimarkinde granda. Li estas la estro de la grupo, Shabani, kaj mondfama pro sia tre bonaspekta vizaĝo. En memoraĵaj butikoj, multaj varoj relataj al li, kiel pluŝa pupo, T-ĉemizo, kaj eĉ fotolibro, estas vendataj.

[utilaj informoj]
aliro: piede 3 minutojn de la elirejo n-ro 3 el la stacidomo *Higashiyama Koen* (*Higashiyama* metroa linio)
malfermo: 09:00-16:50 ĉiutage (biletoj vendataj ĝis 16:30)
fermo: lundo (se lundo trafas nacian feritagon, tiam ĝi malfermiĝas, kaj la sekvan tagon anstataŭe fermite), jarfinaj 3 tagoj kaj la 1-a de januaro
enirbileto: 500 enoj
URL: http://www.higashiyama.city.nagoya.jp/

(IMAJDA Kenĝi)

dukolora mielvorulo

ĝangala kato

Ĉu la homaro povas progresi al eterna paco?

Mi iam legis "Al Eterna Paco", verketon de Immanuel Kant. Ĝi konsistas el ses enkondukaj artikoloj, tri definitivaj artikoloj, du suplementoj kaj du apendicoj. Interalie notinda estas la tria enkonduka artikolo, kiu apelacias al abolo de regulaj armeoj, same kiel la naŭa artikolo de la Konstitucio de la Regno Japanio.

Li skribas: "Regulaj armeoj senĉese minacas aliajn ŝtatojn per milito, per ĉiama preteco por atako. Ili instigas senfinan reciprokan konkurencon de armeaj fortoj kaj plimultigas elspezon por eventuala milito; portempa paco tiel tenata fariĝas pli ŝarĝiga ol mallonga milito. Por eviti ŝarĝon, regulaj armeoj mem kaŭzas anticipan atakon."

Laŭ Kant, paco ne estas natura stato inter la homoj, sed devas esti kreita. Li pensis, ke por realigi eternan pacon sur la mondo devas esti starigitaj la tri bazoj: (1) Respublika konstitucio en ĉiuj ŝtatoj. (2) Internacia juro surbaze de la koalicio de liberaj ŝtatoj. (3) Monda civitana juro cele al amikeco inter popoloj. Kaj li konkludas, ke la vera eterna paco ne estas vanta ideo sed estas tasko iom post iom plenumenda, ĉar al ĝi ne mankas reala bazo kaj ĝi estas nia devo.

Kiel ni nuntempuloj respondu al lia apelacio? Nemalmulte da homoj eble forĵetas ĝin, dirante ke ĝi estas tro idealisma kaj optimisma. Laŭ ili, ankaŭ la naŭa artikolo de la Japana Konstitucio estas tro idealisma, kaj Japanio devas amendi ĝin por havi proprajn armeojn. Ĉu do eterna paco estas nenio alia ol iluzio aŭ revo?

Certe necesas vidi la realan figuron de la mondo, ne nur babilante pri idealo. Sed kiel eblas homeca vivo sen idealo? Se ni vivus sen idealo, kial necesus politiko kaj kulturo? Bone, ni vidu la realon. La minaco de milito troviĝas, kaj tial ni devas nin prepari, inkluzive de armeoj. Armea forto tamen ne garantias pacon. Ĝi similas al asekuro, kiu ne garantias longvivecon. La bazo de longa vivo estas taŭgaj manĝado, sporto kaj kuracado. Tiel same, la bazo de paco estas amikeco, negocado, demokratio k.t.p.

Kelkaj opinias, ke malinstiga forto de nukleaj armiloj estas utila. Teorie tiu ĉi opinio ŝajnas valida, sed ne ĉiam. Ekzemple, bankrotiĝanta/-onta ŝtato ne timas venĝan atakon. Teroristoj ne havas teritorion, kiun aliaj ŝtatoj povas ataki. Antaŭ troviĝas la ebleco de eventuala eksplodo de nukleaj armiloj, ĉu tio estas intenca, ĉu akcidenta. Subtenantoj de nukleaj armiloj devas vidi la realon.

Ĉu la homaro povos finfine atingi eternan pacon? Miaopinie, eble jes, eble ne. Sed ni iom post iom progresas. Nur lastatempe ni ekopiniis, ke milito estas peko, sed antaŭe ne. Venkintoj en milito estis laŭdataj kiel herooj. Nur malmulte da sanktuloj instruis, ke ni devas ne damaĝi viv-estaĵojn. Sed ilian predikon oni ignoradis. Ĉie ajn regis krueleco kaj despotismo. Invadi kaj ekspluati aliajn landojn estis pravigite sub la nomo de civilizacio. Nuntempe multaj homoj en la mondo akuzas invadan militon. Por komenci militon ŝtataj gvidantoj bezonas ian motivon por pravigi sin. Tio estas grava progreso por la homaro. La opinio, ke milito neniam malaperos, estas tro pesimisma. La opinio, ke armea forto ne

necesas, estas tro optimisma. Ni devas stari inter la du ekstremoj. Senĉesa klopodado per diplomatiaj rimedoj kaj per transnaciaj interŝanĝoj tre probable kondukos al pli bona mondo.

(Yamaguti Sin'iti)

**関西エスペラント連盟機関誌 "La Movado" 804号（2018年02月）初出。許可を得て転載。

活動日誌（10月から12月）

10／9（金）17時半から19時半　中級講習会
10／14（水）18時半から19時半　第107回日本エスペラント大会実行委員会（反省会）
10／14（水）19時半から20時半　センター委員会
10／15（木）14時から16時　入門講習会
10／23（金）17時半から19時半　中級講習会
11／5（木）14時から16時　入門講習会
11／13（金）17時半から19時半　中級講習会
11／18（水）14時から16時　入門講習会
11／18（水）19時から20時半　センター委員会
11／24（火）16時から18時　読書会（オンライン）
11／27（金）17時半から19時半　中級講習会
12／11（金）17時半から19時半　中級講習会
12／14（月）19時から20時半　センター委員会
12／21（月）14時から17時　永瀬・中山（翻訳研究会）
12／22（火）15時から18時　読書会（オンライン）
12／28（月）14時から17時　永瀬・中山（翻訳研究会）
12／29（火）14時から17時　蔵書調査

中級講習会

中級講習会は、毎月2回（時として1回）17時半から19時半、小川一夫さんを講師として開催しています。テキストは決まっておらず、随時プリントを用意します。さらに進め方も、エスペラント（および日本語）での会話練習や雑談等変則的です。参加費はありません。受講は随時可。

維持員総会

日時：3月27日（土）13時から16時
場所：名古屋エスペラントセンター事務所
◎維持員総会はセンターの議決機関で、毎年3月に定例会が開催されます。皆様のご出席をお願いします。（出席できない場合は、委任状の提出をお願いします。）
ただ、コロナ禍ということもあり、現地での出席だけでなく、オンラインでの出席もできるようにしますので、オンライン希望者は山口眞一へご連絡下さい。おってIDとパスワード付きのリンクを送信します。

ザメンホフ祭

もともと12月20日に予定していた「ザメンホフ祭（兼『歴史・文学・エスペラント』出版記念パーティー）ですが、2月7日に延期、さらに3月27日に再延期となりました。上記総会の後となりますが、ザメンホフ祭は維持員（会員）でなくても参加ができます。

日時：3月27日（土）16時半から19時半
場所：リリーバンケット（名古屋市中区錦2-13-25）
会費：5000円（コース料理＋飲み放題、乾杯用シャンパン付）
予約先：山口眞一<syam-z@wa2.so-net.ne.jp>または電話（052-807-1198）へ、3月23日までに。ただし定員15人とします（部屋収容人数の半数）。

▶編集後記

○次号はいよいよ300号となります。記念となる号ですので、皆様にもぜひ寄稿をお願いします。ご自身と名古屋エスペラントセンターとの関わりについて、活動への提言など、テーマは自由。長さも自由。日本語でもエスペラントでも可。文意を損なわない程度に編集者が手を加えることがありますのでご了承下さい。○コロナ禍により、残念ながらリアルに集まれる機会を作りにくくなっていますが、オンラインは新しい生活、そしてエスペラント活動のあり方を示してもいます。とはいえ、リアルな集まりの良さは捨てがたいです。（山口）

センターの会員（維持員）募集中

A:月500円 ／ B:月1,000円 ／ C:月2,000円 ／ D:月3,000円
ランクによる会員資格に差はありません。ランク別及び振込月数を明記して郵便振込（口座番号は表紙タイトル下）へお願いします。メールアドレスがあれば、それもあわせてご記入ください。